

現代青年の交友関係から見た自己受容性と社会的スキル

廣 實 優 子

(2003年9月30日受理)

How are adolescents' friendships related with self-acceptance and social skill?

Yuko Hirozane

Many researchers have recently argued that adolescents in Japan tend to avoid deep relationships with their friends. The present study classified the adolescent's friendships into three types (surface, close, and defensive friendship) and examined the relation of the types with self-acceptance and social skills. Undergraduates completed a questionnaire, and the data for those who indicated that they had close friends were analyzed (210 males, 177 females). It was revealed that males of surface and defensive friendships had lower self-acceptance and those males of surface friendship felt satisfied with friends and didn't necessarily have less social skills than males of defensive friendship. Although there was no significant difference as to social skills among female groups, females of surface friendship had lower acceptance for their sociality and did not have a good relation with close friend. Moreover, the relation between conformity and social skills differed depending on the sex.

Key words: adolescence, friendship, self-acceptance, social skill

キーワード：青年期，友人関係，自己受容性，社会的スキル

問題と目的

近年，青年の交友関係の希薄化が指摘され，友人との親密な関係の回避や同調的振る舞いなどが現代青年の特徴として論じられている（例えば，岡田，1995，上野他，1994）。こうした背景には，様々な心理学的要因が考えられているが，その一つに低い自己受容性が挙げられる。自己を受容することは，従来，個人の自己実現に必要な一要因として位置づけられ（伊藤，1989），“ありのままの自己を客観的に認知し，全体的に肯定する”ことであるとされている。さらに，認知された自己の領域として，身体的側面，精神的側面，社会的側面，役割的側面，全体的側面の5領域を設定する研究（沢崎，1993）の他，自己の多次元性が指摘されており，本研究でもこの点を考慮し，各側面に対する肯定度を自己受容性として捉えている。

さて，自己受容性と対人態度との関連であるが，個人の持つ自己受容性が対人関係に及ぼす影響は少ない。例えば，交友関係を積極的に持つ青年の自己受

容性が高い一方で，表面的で消極的な関係を維持している青年が自己受容的でないことが明らかにされている（廣實，2000）。こうしたことは，青年期に限らず，閉鎖的・防衛的な対人関係を維持する者が自己の存在価値を見出せず，自分を肯定的に捉えられずに自己を受容しがたい傾向にあるという調査結果（高井，1999）とも符合しており，表面的な関係を築く青年の自己受容性は低いことが推測される。

他方で，円滑な交友関係を築くためには，交友関係を適切に調節し，維持するための基本的な技能，いわゆる社会的スキルも必要とされている。近年，社会的スキル不足によって交友関係に困難を示す青年が増えていることが多く指摘されている。例えば，現在，学校教育の現場で深刻な問題のひとつとなっているのが不登校であるが，こうした現象が仲間外れや孤立といった交友関係をめぐる問題を契機として生じているケースが多数あることも報告されている（文部科学省，2001）。

また，橋本（2000）は，大学生の対人方略と社会的

スキルとの関連性を調べた。その結果、青年の交友関係における親密回避と社会的スキルとの間に負の関連を見出した。さらに、交友関係を「表層群」、「無関心群」、「積極群」、「内向群」に分類し、それらの群における社会的スキルを比較したところ、軽く浅い対人関係を志向する「表層群」と自己には積極的であるが他者には消極的な「内向群」において社会的スキルの低さが明らかにされた。このことから、橋本は、現代青年の交友関係が表面的で親密回避しているのは、青年自らが主体的に望んでいるからではなく、社会的スキルが不足していることに起因しているのではないかと考察している。

上記の「表層群」の特徴は、現代青年に特徴的な表面的交友と、「内向群」は自分が傷つけられることを恐れるが故の防衛的なつきあいを志向する現代青年の特徴と一致しており、青年の自己受容性だけでなく、社会的スキルの要因も含めた考察が必要であると考えられる。

そこで、本研究では、現代青年の交友関係において、その特徴である表面的交友、親密回避交友を見出すことを前提として、これらの交友関係における自己受容性、社会的スキルとの関係を明らかにすることを目的とする。

ただし、一概に友人と言ってもその内容や意義は親密さのレベルや同性か異性かなどによって大きく異なるため(和田, 1993)、「友人」については、同性で、普段から親しくしている友人のうち、最も親しいと感じている人と限定し、その人との関係を尋ねることで、友人との関係をより厳密に明らかにしたい。

さらに、見出された表面的交友や親密回避交友の青年が、本当に親密でないと感じているのか、また、その関係に対してどの程度満足しているかという親密度、満足度を併せて調査することによって、彼らが持つ交友関係像をより明確に描き出すことができると思われる。

方法

1. 調査対象と調査時期

国公立大学生437名(男子251名, 女子186名)を調査対象とした。調査は2002年1~2月に一斉方式で実施した。

2. 調査内容

(1) 自己受容性に関する調査

伊藤(1992)、沢崎(1993)を参考に作成した20項目。下位尺度は、沢崎と同様、身体的側面、精神的側

面、社会的側面、役割的側面、全体的側面を想定しており、なお、精神的側面においては、性格研究に代表されるBigFiveから計5項目を考案した。

(2) 社会的スキルに関する調査

菊池(1988)のKiss-18(18項目)。

(3) 交友関係に関する調査

まず、①親しい友人の有無について尋ね、「有」の場合、最も親しいと思う同性の友人をひとり想定してもらい、②その友人とのつきあい方(20項目)について尋ねた。20項目は、廣實(2000)から選択した。「無」の場合は、いと想定して②に回答してもらった。さらに、③その友人との関係における親密度、満足度についても尋ねた。

回答は、(3)②のみ4段階評定(とても親密/満足~親密でない/満足でない)で、後は全て5段階評定で行った。なお、分析には、親友が「有」と回答した387名(男子210名, 女子177名)を対象とした。

結果

1. 因子分析結果

(1) 自己受容性

自己受容性尺度について因子分析を行った(主因子法, プロマックス回転)。固有値の減衰状況や解釈のしやすさから、3因子が妥当であると考えられ、2因子以上に高い負荷量を持つ項目や因子負荷量が.35以下の項目は削除する手順をとった。その結果、7項目が削除され、最終的に残った13項目で再度、因子分析を行った。その結果、第I因子は、「考え方」、「能力・特技」、「容姿・スタイル」などの「自己属性」(8項目)、第II因子は、「社交性」、「友人の多さ」、「協調性」の「社会性」(3項目)、第III因子は、「現在の幸福さ」、「現在の自分」の「現在」(2項目)の3因子が抽出された。各因子の α 係数は.78で内的整合性が認められた。

(2) 社会的スキル

同様に、Kiss-18について因子分析を行った(主因子法, プロマックス回転)。方法は、上記の自己受容性尺度と同様の手順をとった。その結果、7項目が削除された。最終的に11項目で再度、因子分析を行った結果、第I因子は、「他人とすぐに会話が始められる」、「自分の感情や気持ちを素直に表現できる」などの「基本的スキル」(5項目)、第II因子は、「気まぐれことがあった相手との上手な和解」や「怒っている相手をうまくなだめる」などの「協調的スキル」(4項目)、第III因子は、「他人にやってもらいたいことをうまく指示できる」、「何か目標をたてるのにあまり困難を感じない」の「自己解決スキル」(2項目)が抽出

された。各因子の α 係数は.70～.87であった。

(3) 交友関係

交友関係尺度についても因子分析を行った（主因子法、プロマックス回転）。方法としては、固有値の減衰状況や解釈のしやすさなどから、あらかじめ抽出因子数を3に指定し、方法は上記の尺度と同様の手法をとった。そして、最終的に7項目を削除し、再度因子分析を行った（Table 1）。その結果、第I因子は、“多少自分が傷ついても本当のことを言い合いたい”、“その人とはお互いに理解しあいたい”、“その人とは自分のありのままに接したい”という「相互理解志向」（5項目）、第II因子は“自分とその他の意見が違う時、自分の意見を変える”、“その人と違うことはしたくない”、“その人と行動をともにしたい”という「同調的態度」（6項目）、第III因子は“その人に自分の考えていることを全部言いたくない”、“その人に自分のすべてをさらけ出すのは危険である”という「親密回避」（2項目）が見出された。各因子の α 係数は.85～.75であった。

なお、各尺度とも性差の影響が考えられるため、男女別に分析を行ったが、結果に多少の差異は認められたものの、ほぼ同様の因子構造が確認されたため、男女込みにして分析を行った。

2. 交友関係の分類と親密度・満足度

(1) 交友関係の分類

上記の交友関係尺度から得られた「同調的態度」、
「相互理解志向」、
「親密回避」の3因子をもとに交友

関係を分類した。方法としては3変数の標準化得点を求め、この値に基づき、求めるクラスター数を3に指定して、k-means法による非階層的クラスター分析を行った。その結果、第Iクラスターは、同調的態度、親密回避傾向が小さく、積極的な相互理解を図っていると思われる「積極群」、第IIクラスターは、同調的態度、親密回避傾向が特徴的な「表面群」、第IIIクラスターは、同調的態度や相互理解志向が低く、親密回避傾向が特徴的な「防衛群」として解釈された（Fig.1）。これらの群と先行研究で得られた見解との関連を示すと、積極群は、従来の青年像に一致する交友関係を持っており、より安定したグループと考えられる。また、表面群は、上野他（1994）で得られた友人への心理的距離が大きいのに同調的な態度をとる「表面群」や橋本（2000）で得られた「表層群」、岡田（1993）における「群れ群」に、さらに、防衛群は橋本（2000）で得られた「内向群」にほぼ匹敵するものと考えられる。

各クラスターにおける人数は、Table 2に示す通りである。

なお、各クラスターの男女構成比について有意差が認められた（ $\chi^2=12.9, df=2$ ）。各クラスターの特徴にも性差がある可能性があるため、以降、男女別に分析を行った。

(2) 各交友群における親密度・満足度

親友との交友関係における親密度・満足度の評定値について群間差を検討するため、一要因分散分析を行った。なお、多重比較はTukey法を用いた。分散分析

Table 1. 友人関係因子分析結果

| 「相互理解志向」($\alpha=.85$) | | | |
|--------------------------|--------|--------|--------|
| 多少自分が傷ついても、本当のことを言い合いたい | 0.837 | -0.062 | -0.041 |
| その人とはお互いに理解しあいたい | 0.769 | 0.152 | 0.077 |
| その人とは本当の姿で接したい | 0.701 | -0.009 | -0.069 |
| その人のありのままの姿を受け止めたい | 0.686 | -0.118 | 0.142 |
| その人とは、ありのままの自分で接したい | 0.650 | 0.038 | -0.121 |
| 「同調的態度」($\alpha=.75$) | | | |
| その人と意見が違う時、自分の意見を変える | 0.022 | 0.849 | -0.014 |
| その人に見捨てられないよう行動する | -0.049 | 0.711 | 0.159 |
| その人が賛成してくれそうな意見を言うことが多い | 0.036 | 0.675 | 0.211 |
| その人と違うことはしたくない | -0.010 | 0.671 | -0.088 |
| その人と行動をともにしたい | 0.045 | 0.594 | -0.285 |
| 内心イヤと思っても、イヤと言えない | -0.035 | 0.395 | 0.014 |
| 「親密回避」($\alpha=.80$) | | | |
| その人に自分の考えを全部言いたくない | 0.114 | -0.066 | 0.976 |
| その人に自分のすべてを暴露するのは危険である | -0.162 | 0.054 | 0.650 |
| 寄与率(%) | 24.3 | 19.3 | 10.2 |
| 累積寄与率(%) | 24.3 | 43.6 | 53.8 |
| 因子相関行列 | | | |
| I | 1.00 | -0.08 | -0.15 |
| II | -0.08 | 1.00 | 0.27 |
| III | -0.15 | 0.27 | 1.00 |

に用いた要因の記述統計は、Table 3 に示している。その結果、男子の親密度は、積極群>表面群、防衛群 ($F_{(2,165)}=10.2, p<.01$)、満足度は、積極群>表面群>防衛群 ($F_{(2,153)}=31.5, p<.01$) であることがわかった。女子において、親密度は、積極群>表面群 ($F_{(2,128)}=5.4, p<.01$)、満足度は、積極群>表面群、防衛群 ($F_{(2,165)}=10.2, p<.01$) であった。

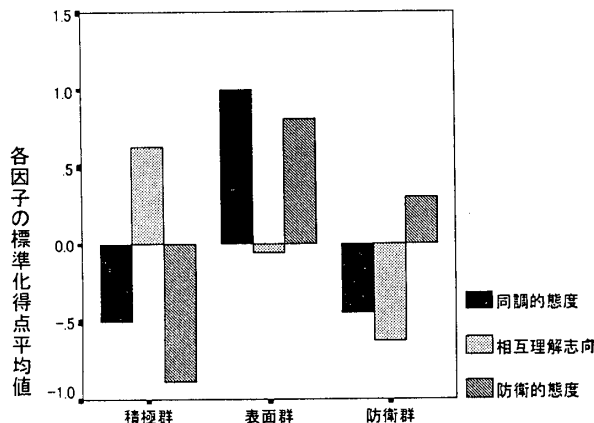


Fig.1. クラスタ分析結果

Table 2. 各クラスターの男女構成人数

| | クラスター | | | 合計 |
|-------|-------|-----|-----|-----|
| | 積極群 | 表面群 | 防衛群 | |
| 性別 男子 | 67 | 82 | 58 | 207 |
| 女子 | 60 | 29 | 48 | 137 |
| 合計 | 127 | 111 | 106 | 344 |

Table 3. 分散分析に使用したクラスターごとの各変数の記述統計

| | 積極群 | | 表面群 | | 防衛群 | | | | | | | |
|---------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|
| | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | 男子 | 女子 | | | | | | |
| | M | (SD) | M | (SD) | M | (SD) | | | | | | |
| 親密度 | 3.60 | (0.49) | 3.73 | (0.45) | 3.41 | (0.50) | 3.24 | (0.52) | 3.17 | (0.44) | 3.39 | (0.53) |
| 満足度 | 3.66 | (0.48) | 3.46 | (0.51) | 3.24 | (0.43) | 3.04 | (0.61) | 2.96 | (0.47) | 3.16 | (0.55) |
| 自己属性 | 28.30 | (4.17) | 25.00 | (3.76) | 27.22 | (4.94) | 22.72 | (4.74) | 24.71 | (5.23) | 23.88 | (5.05) |
| 社会性 | 11.34 | (2.24) | 9.95 | (2.61) | 10.15 | (2.79) | 8.41 | (2.41) | 8.03 | (2.29) | 9.70 | (2.49) |
| 現在 | 7.46 | (1.28) | 7.20 | (1.54) | 6.59 | (1.90) | 6.66 | (1.47) | 6.16 | (1.88) | 7.00 | (1.92) |
| 基本的スキル | 14.99 | (3.58) | 15.23 | (3.68) | 14.30 | (5.58) | 14.34 | (3.98) | 13.03 | (2.88) | 14.18 | (4.24) |
| 協調的スキル | 13.54 | (2.45) | 12.80 | (1.94) | 13.29 | (3.40) | 11.57 | (3.11) | 10.16 | (2.74) | 12.14 | (2.57) |
| 自己解決スキル | 6.48 | (1.96) | 6.45 | (1.22) | 6.39 | (1.82) | 5.34 | (1.80) | 6.26 | (1.35) | 6.28 | (1.78) |

Table 4. 友人関係と社会的スキルとの相関係数

| | 男子 | | | 女子 | | |
|---------|--------|--------|--------|---------|--------|--------|
| | 同調態度 | 相互志向 | 親密回避 | 同調態度 | 相互志向 | 親密回避 |
| 基本的スキル | .07 | .46 ** | -.13 † | -.07 | .24 ** | .01 |
| 協調的スキル | .24 ** | .40 ** | -.20 | -.12 | .27 ** | -.13 † |
| 自己解決スキル | -.02 | .14 * | .13 † | -.30 ** | .20 * | -.15 † |

** $p<.01$ * $p<.05$ † $p<.10$

3. 交友関係と自己受容性・社会的スキル

(1) 各交友群における自己受容性・社会的スキル

(ア) 自己受容性

「自己属性」, 「社会性」, 「現在」の各因子について項目の合計得点を求め、一要因分散分析を用いて群間差を検討した。その結果、男子では、「自己属性」について、積極群、表面群>防衛群 ($F_{(2,206)}=9.1, p<.01$)、 「社会性」について、積極群>表面群>防衛群 ($F_{(2,206)}=27.9, p<.01$)、 「現在」について、積極群>表面群、防衛群 ($F_{(2,206)}=9.6, p<.01$) であった。また、女子では、「社会性」についてのみ有意差がみられ、積極群>表面群 ($F_{(2,136)}=4.0, p<.05$) であった。

(イ) 社会的スキル

同様に、「基本的スキル」「協調的スキル」「自己解決スキル」についても項目の合計得点を求め、一要因分散分析で群間差を検討した。その結果、男子では、「基本的スキル」について、積極群>防衛群 ($F_{(2,206)}=3.2, p<.05$)、 「協調的スキル」について、積極群、表面群>防衛群 ($F_{(2,206)}=25.6, p<.01$) であった。また、女子については、有意差は見られなかった。

(2) 交友関係と社会的スキルとの関係

次に、「同調的態度」, 「相互志向」, 「親密回避」 3つの各得点と各社会的スキルの得点との相関係数を算出した (Table 4)。その結果、男女とも、「相互志向」と全てのスキルに正の相関が見られた。また、男子では、「同調的態度」と「協調的スキル」との間に正の

相関が、女子については、「同調的態度」と「自己解決スキル」との間に負の相関が見られた。

考 察

本研究では、青年における交友関係、社会的スキル、自己受容性との関係を調べた。親友とのつきあい方によって表面群、積極群、防衛群に分類したうえで、自己受容性や社会的スキルに違いが見られるかを検討した。

その結果、自己受容性の3つの下位尺度（「自己属性」、「社会性」、「現在」）に関して、男子では、積極群が表面群または防衛群よりも高かった。また、女子では、「社会性」についてのみ、積極群が表面群よりも高かった。このような結果は、廣實（2000）と一致する。表面群と防衛群の共通点は、友人との相互理解が低く、親密な関係を回避する点である。そのような青年は、自己受容性が低いことが示唆された。

一方、社会的スキルに関しては、男子のみ群差が見られた。すなわち、「基本的スキル」および「協調的スキル」について、防衛群が積極群や表面群よりも低かった。防衛群の社会的スキルが低いことは、親密回避と社会的スキルとの間に負の関連を見出した橋本（2000）と一致する。しかし、表面群では、社会的スキルは、必ずしも低くなかった。友人に同調したり、合わせたりすることは必ずしも否定的なことではなく、青年が友人とうまくやっていくための必要不可欠なスキルであることを伺わせる。しかも、その親密度や満足度はより肯定的なものであることが示されており、友人に深入りせず、また自分の内面にも立ち入らせないようにしながらも、適当なところで友人関係を保つことに不満を感じない姿は、現代青年のひとつの適応の表れであるのかもしれない。また、女子では、表面群、積極群、防衛群の間に社会的スキルの違いは見られなかった。これらのことは、表面群の男子や表面群、防衛群の女子が友人との相互理解や親密な関係を避けるのは、社会的スキルが欠如しているためでないことを示唆している。

また、交友関係と社会的スキルとの関係の分析から、男女とも、「相互理解志向」と社会的スキル全般との間に正の相関が見られた。このことの解釈として、友人との相互理解を志向することが社会的スキル全般を高めることも考えられるし、逆に、社会的スキル全般が高いことが友人との相互理解を促進することも考えられる。他方、女子では、「同調的態度」と「自己解決スキル」の間に負の相関が見られた。女子の場合、友人に同調するという他者依存的な態度によって、自

分で問題を解決するためのスキルを獲得する機会が阻害されている可能性がある。

以上のことから、希薄な交友関係を取り結ぶ防衛群と表面群の男子では、社会的スキルが低く、自己受容性も低い防衛群と、社会的スキルは必ずしも低くないが、自己受容性が低い表面群がいることが明らかとなった。これらの青年は、積極群の青年と比べると友人関係に対する親密度や満足度が低く、決して現状を肯定しているわけではないものと思われる。それにも関わらず、交友関係をより親密なものに変えていくことができないのは、自分のありのままを肯定することができないことにその一因があり、また、友人との相互理解を通して、社会的スキルを十分に高める機会が少ないこととも関係していると考えられる。しかし、青年が積極群ほどの親密さを望んでおらず、適度なところで満足を得ているとも解釈できる。表面的な関係を維持する現代青年にとって、他人に深入りした人間関係は、自分を傷つけられる可能性が高く、他人のことに煩うのが面倒くさいのかもしれない。また、発達的な見地からも、女子が他者との関係の中から自己概念が発達するのに対して、男性はより大きな達成に基づいた自己概念が発達すると言われている（Maccoby, 1996）。こうしたことから、男子にとって友人関係は女子ほど自己確立を促進させる重要な要因ではないことも影響していると推測される。ただし、こうした結論に至るには、更なる検討を重ねる必要がある。

【引用文献】

- 橋本 剛 2000 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略との関連 教育心理学研究, 48, 94-102.
- 廣實優子 2000 青年期における自己受容性と交友関係との関連 日本心理学会第65大会発表論文集 Pp.669.
- 伊藤美奈子 1992 自己受容を規定する理想-現実の差異と自意識についての研究 教育心理学研究, 40, 164-169.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する-一向社会的行動の心理とスキル- 川島書店.
- Maccoby, E. E. 1994 Commentary: Sex segregation in childhood. In C. Leaper (Ed.), *Childhood sex segregation: Causes and consequences: New direction for child development*. San Francisco. Pp.87-98.
- 文部科学省(編) 2002 文部科学白書(平成13年度) 財務省印刷局発行.
- 岡田 努 1995 現代大学生の交友関係と自己像・友

- 人像に関する考察 教育心理学研究, **43**, 354-363.
- 岡田 努 1993 現代の大学生における「内省及び友人関係のあり方」と「対人恐怖心性」との関係 発達心理学研究, **4**, 162-170.
- 沢崎達夫 1993 自己受容に関する研究(1)―新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討― カウンセリング研究, **26**, 29-37.
- 高井範子 1999 対人関係性の視点による生き方態度の発達の研究 教育心理学研究, **47**, 317-327.
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, **42**, 21-28.
- 和田 実 1993 同性友人関係：その性および性役割タイプによる差異 社会心理学研究, **8**, 67-75.
- (主任指導教官 湯澤正通)